

## ロシアにおける「演劇の年：2019」の諸相

田中まさき

2019年はロシアにおける「演劇の年」と定められ、2018年12月13日にヤロスラヴリのヴォルコフ名称劇場で催された華やかなセレモニーで、大統領ヴラジーミル・プーチン(1952-)がその幕開けを宣言した。「演劇の年」には、19年に25周年を迎えるシアターオリムピックス(第9回)やチャーホフ記念演劇祭(第14回)といった国際的な行事が関連付けられたほか、国内600を超える文化機関の参加、全土で2600を超える行事が予定され、舞台芸術を媒介として国民の一体感が高められた。さらには、全国を横断する「演劇マラソン」の開催やマールイ劇場の新しい分館の完成、演出家ゲオルギー・トフストノーゴフ(1915-1989)の名を冠するペテルブルグのポリショイ・ドラマ劇場の創立100周年などを通じて、演劇界の一層の飛躍が見込まれていた。しかしこの「演劇の年」には、近年のロシア演劇をめぐる動きが反映されただけでなく、事前の期待とは裏腹に、演劇界を大きく揺さぶる波乱も生じた。

## 1. マールイ劇場の新分館

この「演劇の年」関連行事のうちとくに興味深いものは、マールイ劇場の新分館落成である。ロシアで最も格式高い劇場の一つであるマールイ劇場は、モスクワの演劇広場に面する本館のほかに、都心部のザモスクワレーチエ地区にも分館(フィリアル)を擁し、公演を行なってきたが、このたび新たな分館を地方都市コガルイムに構えることになった。

コガルイムは西シベリアのハンティ・マンシ自治管区にあり、鉄道のスルグート＝ノーヴィ・ウレンゴイ線沿いに1976年に開村した、人口6万7千人ほどの小都市である。<sup>1</sup> マールイ劇場は長い伝統を誇るだけでなく、劇聖アレクサンドル・オストロフスキー(1823-1886)との深い縁から「オストロフスキーの家」の異名を持つ、ロシア演劇の象徴でもある。マールイ劇場は大祖国戦争の折にチェリャビンスクへ疎開したことはあるが、分館がモスクワを離れて初めて常設されるのがコガルイムであるというのは、地理的条件(北緯62度16分・東経74度29分)や都市の規模から見ると違

---

<sup>1</sup> [<http://admkgalym.ru/city/about/>]

和感しかない。コガルイムはオムスク（人口 116 万人）の北 810km、ノボシビルスク（同 161 万人）の北西約 940km、エカテリンブルグ（同 148 万人）の北東約 990km といった位置にあり、すでにこれらの都市では定評ある大劇場が活動している。

ただし、全ての不自然さはコガルイムという町の特殊性によって覆される。コガルイムは人口増と所得増により右肩上がりの成長を続けている点で注目を集める街だからだ。<sup>2</sup> 元々コガルイムは水利に恵まれた地域にあるが、西シベリアにおける石油生産開始に伴い 1970 年代から歴史が始まった。住民の 57%強がロシア系であり、次いでウクライナ系 10%、タタール系 9%、以下アゼルバイジャン系、バシキール系、クムイク系と続く。計画経済の時代に成立した、石油生産に依存する単一的な小都市はソ連崩壊によって打撃を受けたが、1991 年に当地の石油生産組織が石油コンツェルンであるルクオイルに編入されたことが発展の転機となった。ちなみに 91-93 年にコガルイムの市長を務めたのは、ハンティ・マンシ自治管区の出身で現モスクワ市長のセルゲイ・ソビャーニン（1958-；在職 2010-）である。

2005 年にルクオイルはハンティ・マンシ自治管区と、地域発展のための協定を結んだ。この後コガルイムは、原油価格が世界的に上昇する気運を背景に企業城下町として成長する。コガルイムではルクオイル運営によるモデル都市として、関連企業で働く地域住民のための施設や環境整備が進んだ。設備の整った子ども園やレベルの高いスポーツ・文化複合施設を目当てに若い世代が増えたほか、この街の医療の充実や全国平均よりも高い水準の年金支給は国中に喧伝されている。さらにルクオイルがコガルイム市街の南 8km に設けた全天候型の国際空港は、CIS 域内における空港の中で 2006 年度の最高評価を受けた。

コガルイムには 90 年代に既にロシア正教会の教会が建てられていたが、ルクオイルは敷地面積 2000 平方メートル超の新しい聖堂を寄進し、この聖堂は 2018 年 9 月にコガルイムを訪問したモスクワ総主教キリル（1946-）から祝福を受けた。今回のマールイ劇場の新分館建設もまたルクオイルの資金提供によるもので、19 年 3 月 22 日の柿落としにはオストロフスキーの傑作戯曲『どんな賢者にもぬかりはある』が上演された。この新分館ではマールイ劇場がモスクワでの上演舞台をそのまま持ち込むほか、地域の学生達に施設を開放し、文化育成事業の拠点となることが期待されている。コガルイムは 2000 年代のオイルマネーを前提に、ルクオイルが創り上げた一種の「理想郷」であるが、新聖堂やマールイ劇場分館の建設を鑑みるに、今後も発展が当て込まれているのだろう。

---

<sup>2</sup> [<https://lenta.ru/articles/2017/10/23/kogalym/>]

## 2. 演劇マラソンと「大巡業」

「演劇の年」の目玉企画である「演劇のマラソン」は、1月18日にウラジオストクをスタートし、駅伝のたすきのように「劇場から劇場へ、地域から地域へ」と繋がる記念トロフィーのリレーが始まった。そのルートは国土全域の85の地域（レギオン）を網羅しながら全土を横断し、11月15日に西端に当たる飛び地のカリーニングラードでゴールする。この「マラソン」にはおよそ100の劇場が参加を予定し、芝居上演のほか、演劇人によるマスタークラスやフォーラムが各都市で開催され、ルート上の随所で準備された記念セレモニーが祝祭を盛り上げた。

「マラソン」による一連の行事と共に、地域の劇場を活気付けたのが文化省肝いりの企画「大巡業」である。大巡業では、外国の劇場の公演、地域内での劇場間の交流、異なる地域に属する劇場間の交流、児童演劇などのカテゴリーに分かれて、各地で上演が行なわれた。特に、モスクワやペテルブルグの大劇場による国内巡業公演と、答礼としての地域の劇場の首都公演、地域の劇場同士の相互交流が促進された。元々「大巡業」は、以前から文化省が推進してきた企画である。2014年2月には、先進的な劇場が巡業活動を行なうためのサポートセンターが文化省内に設置された。<sup>3</sup> この時ロシヤ・ガゼータ紙の取材に対し、文化省の担当者ソフィア・アプフェリバウム(1979-)が説明するところでは、地方で開催される演劇祭(芸術祭)がこの20年ほど(2014年当時)で増大し、ソヴィエト時代の巡業のあり方とは需要が変わったこと、自前の劇場を持たない地方のリクエストに応えるため、そして地域(レギオン)の劇場の巡業をサポートするため、国全体を総合的に統括する必要が出てきたためだとしている。興味深いのは、それ以前の(ソヴィエト時代以来の)巡業は個々の劇場の裁量に任されてきた(巡業に出る劇場が申請書を提出し、文化省がそれを受理することで可能になる)、というアプフェリバウムの言及である。すなわち、かつて巡業公演という大掛かりな移動は、それぞれの劇場の事務長(ディレクター)同士の事前合意の下に行なわれる、従来からの関係性や信頼あつてのものだった。近年盛んになった演劇「祭」という新しい枠組みが、旧来のネットワークを壊して新しいシステムを要求した、現状の反映とも受け止められる。しかし、同記事が紹介する文化大臣ヴラジーミル・メデンスキー(1970-)の言によれば、これは文化省(=国)が巡業を中央集権的にコントロールする新しいシステムの誕生である。ならばこのシステムは、巡業にまつわる劇場間の関係性を廃し、その権益を演劇人から取り上げ、演劇界を国家の手段として利用することができる。その点で、大巡業のアイデアは危険をはらんだものである。この14

<sup>3</sup> [<https://rg.ru/2014/02/13/gastroli.html>]

年のセンター創設当時、巡業に動員される予定の劇場としては、演劇界の序列上位にある22の「連邦の федеральный」劇場のほか、地方が要望するモスクワの人気劇場として「現代人（ソヴレメンニク）」劇場やフォメンコ工房の名前が挙げられていた。

さて、この「連邦の」とは20世紀のロシア演劇界ではあまり見かけなかった形容詞だが、近年多用されている傾向には注目すべきである。「連邦の劇場」といえば、かつて事典的な記述では1930年代アメリカ合衆国の事例を指し、大恐慌時代の景気対策と演劇人救済を目的に設立された単数形の固有名詞であった。ところが現代ロシアでは、「連邦の劇場」が普通名詞化して複数形で用いられている。

例えば、ソ連期の名喜劇俳優アルカーゲイ・ライキン（1911-1987）を父にもつ、俳優のコンスタンチン・ライキン（1950-）が率いるモスクワのサチリコン劇場は、独立採算性が比較的高い私立の劇場だが、「連邦の」劇場であり大巡業の派遣対象になっている。果たしてこの言葉は、公的な助成を受ける際の団体の帰属先を指すのか、存在感の大きさや格式を表わしているのか、判然としない。ソ連期以来、演劇界のヒエラルキーは、「国立」や「アカデミー」などの伝統や地方自治の区分意識と結びついた称号を基準に明確化していたが、新しい概念の出現は予算配分の問題とも絡んで、序列見直しを進めるのかもしれない。予算の大半を公的助成に頼る、地方の「国立」劇場の国庫負担を減らすために、「地域の」「独立した」劇場へと改組が進められた例もある。<sup>4</sup> かつて2008年には、夏に起きたジョージアとの紛争と、その後のリーマンショックによって生じたロシア経済の動揺が演劇界にも波及し、中央は劇場を支援する財政出動を請合う一方、地方では予算の削減が予告された。多様な演目を準備し、毎月上演カレンダーを編成していくレパートリーシステムを根底に、常設の劇団と一体化している点で日本より複雑化しているロシアの劇場運営は、トップの思惑によって容易に翻弄されるものでもある。

プーチン政権はロシアの舞台芸術を、国内には国民教育の有効な手段の一つとして活用し、国外に対しては、規模によっても内容によっても世界最高のものと称揚している。<sup>5</sup> 日露間では特に近年、日本側の代表として演出家の鈴木忠志氏（1939-）を中心に、2002年から演劇を通じた文化交流が行なわれ、フォメンコ工房やモスクワ芸術座（チェーホフ名称）が来日公演した。鈴木氏の長年の尽力が認められ、今年のアタターオリンピックスは露日共催の形が初めてとられた。ロシア側の主催者はペテルブルグのアレクサンドリンスキー劇場芸術監督ヴァレーリー・フォーキン（1946-）である。

---

<sup>4</sup> [[http://www.ng.ru/culture/2008-12-15/10\\_yaroslavl.html](http://www.ng.ru/culture/2008-12-15/10_yaroslavl.html)]

<sup>5</sup> [<http://kremlin.ru/events/president/news/59400>]

舞台芸術が国内政治に利用されることを意識すれば、演劇界の最上位にあり続け、連邦の劇場としても機能するペテルブルグのマリンスキー劇場の動きは興味深い。現在マリンスキー劇場は、本拠地のペテルブルグの諸施設のほか、6年ほど前から極東ウラジオストクで、2年前から北オセチアのヴラジカフカスでも分館を運営している。ウラジオストクの分館は、極東の文化振興に加えて日本・中国・韓国からの若手芸術家との交流を念頭に、従来の音楽劇場がマリンスキーの傘下に編入されたものである。ウラジオではマリンスキーの分館に加え、今後エルミタージュ美術館やロシア美術館などの分館、ならびに教育機関を合わせた巨大複合文化施設（クラスター）が構想されている。なお、同様の重要拠点がケメロヴォ・カリーニングラード・セヴァストーポリにも建設予定で、マリンスキー劇場の公演とロシアの文化財の展示がこれらの重点化された4都市を巡って行なわれることになる。<sup>6</sup> これらの都市が広大なロシアの外縁部にあることは、国際情勢へのロシアの敏感な防御意識を反映しているようでもある。

### 3. ゴーリキー名称モスクワ芸術座の内紛

2018年12月4日、「演劇の年」の開幕間際に突如として、トヴェルスコイ並木道にあるゴーリキー名称モスクワ芸術座（MXAT）の新しい芸術監督が発表された。動揺する劇場スタッフに新人事を公示したのは、文化大臣メジンスキーとヴラジーミル・トルストイ（1962-）である。ヴラジーミル・トルストイは文豪レフ・トルストイの玄孫にあたり、ヤースナヤ・ポリャーナにある作家の博物館館長を務める一方、2012年から大統領文化顧問の一人でもある。ペレストロイカ期の1987年に芸術座が2つの組織に分裂して以来、ゴーリキー名称の劇場を支え続けた大女優タチヤーナ・ドローニナ（1933-）は新設された「総裁」職へ移され、後任に就いたのは演劇プロデューサーのエドゥアルド・ボヤコーフ（1964-）である。新指導部は、ボヤコーフ監督の下、文芸担当の責任者として作家のザハール・プリレーピン（1975-）、俳優で演出も手がけるセルゲイ・プスケパリス（1966-）を監督代理とする三頭体制でスタートした。ボヤコーフによれば、彼自身は以前から旧指導部と文化省に対し、ゴーリキー名称芸術座の改革について提言を重ねていたもので、この交代劇は驚くにあたらないという。しかし人事公示前、高齢女性のドローニナを壮年の男性陣が長時間説得していたという風聞もあり、一種のクーデターが起きたと考えられる。そしてこの事件は、旧来の右派が急進的な極右に取って代わられたように見える。前芸術監督ドローニナの政治的傾向は、演劇

<sup>6</sup> [<https://tass.ru/kultura/5917278>]

界では少数派の、ソ連期以来の（やや旧弊な）右派とみなされていたが、ボヤコーフは伝統を尊重するドローニナの態度をむしろ評価していた。しかしボヤコーフにとっては、ドローニナの姿勢は充分ではなかったようである。ボヤコーフはより直裁に保守を表明し、「劇場とは常にイデオロギーである、真面目な文学や映画と同様に」と発言して、リベラルと目される演劇人たちに攻撃的な態度をとり続けている。<sup>7</sup> その槍玉にあげられたのは、公的助成の使途不明金問題に連座して 17 年夏から自宅軟禁の措置を受けたキリル・セレーブレンニコフ（1969-）である。

近年際立って愛国主義的な主張を持ち、ロシアによるクリミア併合の妥当性を声高に標榜するボヤコーフは、これまでも異色とみられてきた劇場の保守的な方向性を、今後より極端に偏向させることも予測される。新指導部の三人組は「ドネツク人民共和国」とかかわりを持っており、中でもプリレーピンは 14 年から東ウクライナの紛争に参加し、16 年から「ドネツク人民共和国」のザハルチェンコ首相（1976-2018）の顧問を務めたこともある。17 年 5 月にモスクワで「ロシア芸術同盟」という保守派の団体が設立された際には、ボヤコーフは演劇人、プリレーピンは文学者、プスケパリスは映画人として参加している。<sup>8</sup> この「同盟」は、「芸術を用いて国民の（ナショナルな）アイデンティティーを形成すること。愛国勢力の統一を基盤とする、現代の創造的産業の創出と発展」を目的に掲げている。同盟の多岐にわたる活動計画の中では、国や正教会との協同作業も志向されており、特に「文化政策の原則立案。新しい保守派の利益とイニシアチヴのロビー活動」が念頭に置かれている。

ボヤコーフの経歴は、ロシア社会におけるこの数十年の変化を反映した興味深いものである。<sup>9</sup> 1964 年に現在のダゲスタン共和国キジリョールトで生まれ（民族的にはロシア人）、音楽学校を卒業したのち国境警備の兵役に着いた。軍楽隊に所属し、吹奏楽に参加したようである。除隊後、国立ヴォロネジ大学ジャーナリスト学部に入學。その後文学の教鞭を執りながら、ヴォロネジの「若き観客の劇場」で文芸部主任として働いた。ちなみにボヤコーフとヴォロネジの縁は深く、その後 2013 年には当時のヴォロネジ州知事アレクセイ・ゴルデーエフ（1955-）に招かれ、当地の芸術アカデミー総裁を 2 年ほど務めてもいる。ゴルデーエフは 11 年からヴォロネジ出身の文学者アンドレイ・プラトノフ（1899-1951）の名を冠した芸術祭（総監督は演劇人のミハイル・ブイチコフ [1957-]）を運営するなど、文化行政に力を入れていた。ボヤコーフはゴルデーエフの意を汲んで文化事業の革新を訴えたり、大学の学部増設や文化人の招聘、

<sup>7</sup> [<https://www.kp.ru/daily/26820/3857281/>]

<sup>8</sup> [<http://www.rh-soyuz.ru/>]

<sup>9</sup> [<http://www.eizh.ru/articles/sotsiosfera/kulturnaya-voyna-i-eduard-boyakov/>]

さらにかつての掘削機工場跡に新しい文化複合施設（クラスター）建設を計画したりしたという。13年にボヤコフが州政府の会議で提言した『ヴォロネジのパルス』なる改革案は、現地の文化組織の解体・再編の断行を意味すると受け取られて反発を招き、騒動を引き起こした。

ボヤコフは1990年代初めにヴォロネジからモスクワに移り、ビジネスに携わる。ソ連崩壊後の92-93年にはメナテプ・イムペックの広報部長として、93-97年には非公開株式会社「アジルス」（シンガポールの会社アージオ）のゼネラルマネージャーとして働いた。ちなみにメナテプ・イムペックは、実業家ミハイル・ホドルコフスキー（1963-）の設立した企業グループに属する一社である。ボヤコフ自身も、90年代のビジネスマンとしての活動を「粗野なカウボーイのように原油を売っていた頃」と旧懐している。同時期にマーケティングを学び、94年にはモスクワの国際ビジネス高等学院（MIRBIS）でMBAの学位を得たほか、ロシア経済アカデミー（プレハーノフ名称）を出た。

ボヤコフは実業界で一定の成功を見たのち、1998年のロシア金融危機以前にビジネスから演劇界へと活躍の比重を移した。彼が設立に関係した演劇祭や演劇団体・プロジェクトは数多いが、中でも最も有名なものが「ゴールデンマスク（ザラタヤ・マスク）」賞である。94年に始まったこの演劇賞は、演劇大国ロシアで毎年新たに製作される舞台を紹介し、その中から最優秀を表彰することで演劇界を盛り上げることを狙ったものである（ただし現在ではボヤコフは関係を絶ち、批判している）。ボヤコフは、現代ロシアの新興財閥のトップや実業家たちから資金援助を得ているとされ、かつて自身のプロジェクトに協力してくれる支援者の一部として「マムート（1960-；フォーブス誌によるロシア42位の富豪）、アーヴェン（1955-；同21位）、カジミーン（1958-；1996-2007年までズベルバンク銀行総裁）、チェグラコフ（1966年-；ロステレコム副総裁）、ネシス（1962-；投資会社社長）」の名前を挙げている。例えば、このうちマムートとチェグラコフは、ボヤコフ主導で2005年に発起した話題の演劇団体『プラクチカ』の後見者会議のメンバーといった具合である。

18年末にゴリキー名称芸術座の新体制始動後、新作の発表や新しいプロジェクトが提起される一方、内部の軋轢は依然として収まらず、大胆な人員整理が続いている。ドローニナが維持してきた、劇場内の常勤の職は任期付に切り替えられ、新指導部に異論を持つ者は排除されている。かつて、モスクワ芸術座の復活を目指しリストラを断行したオレグ・エフレーモフ（1927-2000）に対抗して、ドローニナは切り捨てられる側を庇護して芸術座の古い看板を守り続けたのであったが、30年余りが過ぎて同じ

構図が繰り返されているかのようだ。「クーデター」後のドローニナには、不満の埋め合わせとして総裁ポストが用意され、19年5月には「国家への奉仕」勲一等が決定した（授与は同年11月）。ただし総裁は、劇場の芸術会議における議長の権限を保持しているものの、メヂンスキーとトルストイもメンバーに含まれるとされる、この芸術会議が開催されたという続報が出てこない。ドローニナは体調不良を理由に舞台出演を控えており、名女優の晩年がこのようなダメージを受けたことは実に惜しまれる。

#### 4. ヴォルコフ名称劇場とアレクサンドリンスキー劇場の合同問題

19年3月27日、「演劇の年」の「演劇の日」はロシア社会を揺るがす大変な一日となった。文化大臣メヂンスキーによる、ヤロスラヴリのヴォルコフ名称ロシア国立アカデミー劇場とペテルブルグのアレクサンドリンスキー劇場の合同の発表である。モスクワの北東250kmにあるヤロスラヴリは、近代ロシア演劇の父フョードル・ヴォルコフ（1729-1763）が18世紀半ばに初めて専門劇場を構えた歴史を誇り、ヴォルコフの名を冠する当地の劇場は慣用的に「ロシア第一の」劇場と称されてきた。他方、ヴォルコフが後に招かれてペテルブルグで開いた劇場の後身が現在のアレクサンドリンスキー劇場にあたる。創始者を同じくする二つの劇場は、いずれも「国立」「アカデミー」の称号を持ち、すでにロシア演劇界の序列上位にあるが、合同によって新たに「ロシア第一のナショナルシアター（大文字で始まる固有名詞）」となることを望んだ。二つの劇場からの請願を受け入れる形で、メヂンスキーは劇場の合同を承認した。しかし合同の企画自体が、社会の大多数にとって寝耳に水の話であり、首相ドミートリー・メドヴェージェフ（1965-）は即日承認差し止めの判断を下した。

メドヴェージェフはこれに先立つ2月には国内の劇場の削減・統合を示唆し、「演劇の日」にもその発言を繰り返していた。<sup>10</sup> ロシア連邦はソ連邦より面積が小さいのに、「国立」劇場の数はソ連期より倍増しているというのが、かねてからの主張である。メヂンスキーはこの主張に沿う形ですでに劇場の再編を進めている。例えば、日本でもよく知られる、ボリス・ポクロフスキー（1912-2009）の「国立アカデミー」音楽劇場は、ボリショイ劇場の一組織に組み込まれることが17年12月に決まった。ただし、ヤロスラヴリとペテルブルグの二つの国立アカデミー劇場の合同は、劇場側（すなわち下から）の発意をくみ上げて文化省が（上から）認める形で発表されたが、首相メドヴェージェフの反応を見れば、この案件におけるメヂンスキーの専横があったことが想像できる。二人の態度の温度差からは、劇場に対する上からの統治に、意見の不一

<sup>10</sup> [<https://www.interfax.ru/russia/650242>]



致を見てとれる。劇場合同の承認のニュースを受けて、ヤロスラヴリでは、ヴォルコフ劇場が「ロシア第一」であることは自明であり、郷土の誇りを他劇場と分け合うことはできないと考える地元住民の激しい反発が起こり、ヤロスラヴリ州知事ドミートリー・ミローノフ（1968-）は正式に反対を表明した。実際、ヤロスラヴリと約 600km 離れたペテルブルグの劇場が合同することは、事実上困難である。世論はリベラルな肯定・容認派と反対派に二分し、しまいには「ロシア第一のナショナル」称号の争奪戦となつて、プスコフなどの他地域の劇場も名乗りを上げるなど、大混乱をきたした。

最終的にこの問題は、6月に大統領プーチンがヴォルコフ劇場を「ロシア文化遺産特別指定認定物」に決定したことによって収束を見た。これにより、ヴォルコフ劇場は「ロシア第一の特別な」存在であることが確認され、演劇界の序列上で別格の地位を受けると共に、他の文化組織と合同することは不可能になったためである。この騒動はある意味で、100年前に制定された「アカデミー」称号の行方を連想させる。1919年に最も由緒ある六つの劇場（モスクワのボリショイ、マールイ、モスクワ芸術座、ペテルブルグのマリンスキー、アレクサンドリンスキー、ミハイロフスキーの諸劇場）に対して与えられた「アカデミー」称号は、権威を認めるだけでなく、ソヴィエト社会における劇場のあり方を規定する首かせの機能を果たしていた。序列優位を表す記号が、戦後にその付与対象を拡大し陳腐化に陥ったことが、今日見られる「連邦の」カテゴリーの頻用や、メドヴェージェフによる劇場削減の議論の発端にあるように思われる。その中で「アカデミー」や「国立」のインパクトを超え、新しい序列を生むアイデアとして、「ロシア第一の」「ナショナルな」称号が求められたのだろう。

さらに、合同反対の立場を取った演劇人同盟議長アレクサンドル・キャリアギン（1942-）が自説の口添えとして紹介した名優オレグ・バシラシヴィリ（1934-）の書簡からは、この問題の別の側面が見えてくる。2つの劇場が合同することの不適切さを指摘した上で、バシラシヴィリは、二つの劇場が「モスクワの新しい拠点」として要求する劇場は、むしろモスクワで巡業公演する国内の地方劇場と外国の劇場のため広く一般に利用されるべきだと訴えた。<sup>11</sup> ここで言及される劇場とは、都心のカメルゲルスキー横丁にあるチェーホフ名称モスクワ芸術座が、地下鉄コロメンスカヤ駅前に設けた新しい分館（フィリアル）のことを指している。これは前芸術監督のオレグ・タバコフ（1935-2018）が注力したプロジェクトで、タバコフは15年11月にモスクワ市長ソビャーニンと起工式に参加している。当初予定ではこの建物は18年11月には完成見込みだったが、17年11月末にタバコフが病に倒れ、翌18年3月に逝去して以

<sup>11</sup> [<http://www.teatral-online.ru/news/24003/>]

来、19年春になっても完工に至っていなかった。モスクワの中心部からやや離れるものの、地下鉄の駅出口からすぐの、街道交差点に面した近代的なビルは120台分の駐車場も備えている。一部報道によれば、14年に工費22億8000万ルーブル（約68億円。14年1月のレート：1ドル35ルーブル、1ドル104円で換算した場合）が連邦予算から支出され、劇場用の最新機材購入には6億7400万ルーブル（上記のレートで約20億円）の予算が割かれた。完工予定だった18年11月には、建物完成のために追加で12億7600万ルーブル（約21億6900万円。18年11月のレート：1ドル66ルーブル、1ドル113円で換算）が連邦予算から支出されたという。直後にタバコフという注文主を喪って宙に浮いたままの新劇場を、アレクサンドリンスキー劇場のフォーキンとヴォルコフ劇場芸術監督のエヴゲーニイ・マルチェッリ（1957-）は狙ったのだ。

19年4月12日、劇場合同の問題をめぐる内紛状態に陥った演劇人同盟に不満を持ち、フォーキンは同盟事務局から退任する声明を発表した。さらに6月、ヴォルコフ劇場の団員たちの要請により、文化省はマルチェッリと対立していた事務長アレクセイ・トゥルカロフ（1959-）の解任を決定した。その後8月には劇場内の確執を引き起こしたとしてマルチェッリ自身も引責辞任した。メゼンスキーによる新監督公募の結果、ゴリキー名称モスクワ芸術座の芸術監督代理を務めるセルゲイ・プスケパリスが選出された。

## 5. まとめ

デジタル技術の発展にともない、上演中の舞台のネット配信が劇場外の数十万の同時視聴を可能にする時代、劇場で生の芝居を実体験することの貴重さがより際立っている。ロシアでは、国家が舞台芸術の持つ力を重視し、後押しをすると同時に、そのあり方について影響力を強めようとしている。

ソ連崩壊から四半世紀以上が過ぎ、ペレストロイカと崩壊後の混乱を支えてきた大物が世を去るなど、演劇界では世代交代が進んでいる。新興財閥や実業家たちが劇場文化の後援に乗り出す一方、地方発の演劇祭が増加し、ソ連時代とは違う劇場の運営、巡業公演の新しいあり方が模索されている。

## 6. 付記

・9月10日、ロシア文化省は「演劇部 департамент театров」を独立して発足させ、大巡業の運用をシステム化することを決めた。体制による舞台芸術への干渉が強まるのではないかと懸念される。

・9月28日、映画界でも活躍した演出家マルク・ザハーロフが85歳で死去した。彼が芸術監督として長く率いた「レンコム」劇場は一世を風靡した。

・10月25日、シアターオリンピックスの記者会見の席で、フォーキンは「アレクサンドリンスキー劇場のモスクワ分館」について言及した。文化省とロシア連邦政府による今回の承認を受け、モスクワ芸術座新分館となるはずだった建物はアレクサンドリンスキー劇場の分館として移管される。フォーキンによると、首相メドヴェージェフは4月にこの移管を承認したとのことである。なお、この分館は22年の開業後、「ナショナルシアター（複数形）のセンター」として、モスクワへ巡業に訪れる地方の劇場や外国の劇団に対しても利用が開放される見通しである。

・12月26日、演出家ガリーナ・ヴォルチェクが86歳で死去した。「現代人」劇場を創始者オレグ・エフレーモフから引き継ぎ、長年にわたって指導した。

1987年 モスクワ芸術座 M X A T (ゴリキー名称) の分裂

